

'85—1

北海道民族学会通信

北海道民族学会

札幌市北区北10条西7丁目
北海道大学文学部行動科学科社会生態学講座内
(011)716-2111内線4163題字：椿坂小雛(點の会所属)
編集：岡田淳子
発行者：岡田宏明
印刷所：(株)北海道機関紙印刷所

『通信』発刊にあたって

岡田宏明¹⁾

北海道民族学会は、昭和56年9月、札幌大学で開催された日本人類学会・日本民族学会連合大会(第35回)の際に、発起人7名の呼びかけに応じて集った30数名の参加者により設立が決議されました。日本民族学会の北海道地区会員の間に、毎年の全国大会以外にも研究発表や交流の場が欲しいという要望が以前からかなり強く、たまたま連合大会の準備委員会で顔を合わせた有志数名が話し合い、札幌で9年ぶりに開かれる連合大会を機に設立総会をもつことに意見が一致したものです。

9月11日の総会では、会の性格や事業の内容について質疑が交わされた後、日本民族学会と密接な連携を保ちながら、独自の学会活動を目指すという内容を盛りこんだ会則が、参加者の圧倒的多数の賛同を得て可決されました。ひきつづき、新会則にのっとって8名の運営委員と2名の監事が、また会長には私が選出され、学会事務局は、当分の間、宮良高弘教授が所属される札幌大学教養部社会学研究室におかれることになりました。

その後、本学会は昭和57年4月から日本民族学会の北海道支部として正式に承認され、学会費のほかに親学会からも若干の補助金をうけて今日まで4年近く活動をつづけてきました。学会設立の機が熟していたためか、会員数も順調に伸び、現在では85名を数えています。昭和58年度以後学会事務局が札幌大学から北海道大学文学部行動科学科社会生態学講座に代わり、運営委員2名が転出

によって交替しましたが、学会活動そのものは当初の目標にそって毎年1回の総会と、3～4回の研究会を中心に活発に展開されてきました。

設立後4年間の活動を通じて、会員相互の交流と情報交換の場を創造し維持するという当初の目標はかなりの程度まで達成できたのではないかと、私はひそかに自負しています。それはなんといっても、札幌地区はもちろん、道内各地から積極的に研究会に参加することを通じて学会活動を支えてくださった会員諸氏に負うところが大きく、非力な会長としては深く感謝しております。

しかしながら、当初からの活動目標の中で、まだ実現されていないことがいくつかあります。会員の協力による共同調査もその一つです。けれども、まず容易に手がとどくことから活動をひろげていくべきでしょう。そこで今年度から「北海道民族学会通信」を皆さんのお手許にとどけることにしました。研究会に出席できない方々のために、研究発表要旨をおとどけたいという考えは以前からあり、総会で御承認を得ていたのですが、私の怠慢から延びのびになっていたものです。当分年2回発行ということで、少しでも会員の皆様の御理解と御協力に応えることができると考えています。刊行することに決めたからには、できるだけよいものを定期的に発行していきたいと思っていますので、どうぞ忌憚のない御批判、御意見をお寄せくださいますようお願いいたします。

1) 北海道大学文学部

1984年度 第3回研究会発表要旨

「バルティの生態」

山田孝子¹⁾

いかだに使用する羊の皮袋に空気を入れている。

1 歴史的背景

バルティスタンは、古代にはガンダーラとタリム盆地間の交易ルートの要衝の地であり、4世紀には Bolor という国に統一され、8世紀前半に吐蕃王国に統合されるまで独立王国として存続していた。しかし、10世紀中頃における吐蕃王国の衰退とともに、この地域は独立の領国となったものと考えられている。

14世紀後半にはイスラムの布教が浸透し始め、15世紀の初めには、この地域にイスラム王朝が成立したと考えられる。インダスの本流および各支流流域ごとに、Khapulu, Keris, Parguta (Khar-mang)、Shigar, Balti (Skardo)、Rundu とそれぞれ独立のイスラム君主国として分かれていた。1841年にドグラの將軍によって征服され、その体制下に入る。かつてのイスラム国としての区分が、現在の行政上の区分ともなっている。

バルティ語は、チベット語の一方言であり、バルティはモスリム化したチベット語系住民である。

2 自然環境

大ヒマラヤ山脈の北側には、大陸的、砂漠的気候が支配するトランスヒマラヤ地帯と呼ばれる地域がある。その西部、カラコルム山脈を北方にひ

かえたインダス河とその支流の谷々がバルティスタンと呼ばれる地域である。この地域は、標高約1,800~3,000mに位置し、植生は乾生ステップで、居住環境は温暖的オアシスである。

3 生態

主な生業活動は農耕と牧畜である。畑作と果樹栽培を基本にした農耕は、谷間の傾斜地の小石の多い土地を、テラス状に整備して行なわれている。乾燥地域のため、縦横にめぐらした水路を利用した灌漑によってはじめて耕作が可能となる。オオムギ、コムギを一次作物、アワ、キビ、ソバ、マメ類を二次作物とする2毛作を行ない、その他にカブ、サトウダイコン、ジャガイモ、ウリ類等の副食用蔬菜類、香辛料を栽培する。果樹には、クワ、モモ、リンゴ、西洋ナシ、アンズ、クルミ等がある。このうち、アンズは多量に植樹されており、干しアンズは一年を通じて利用される。

牧畜は、ヤク、ヤクと牛の種間雑種である「ゾー」(雄)と「ゾモ」(雌)、牛、山羊、羊を対象とし、夏季には標高3,000m近くの牧場での放牧、冬季には集落内での飼育という移牧形式で行なわれている。ゾモ、雌牛、雌山羊、雌羊を1日2回搾乳し、ミルクおよびバター、ヨーグルト、チーズ等の乳製品を食用とする。「ゾー」は、畑の開墾、ムギ類の脱穀に欠かせないものである。また、ヤクや山羊の毛を紡いでマットを、羊の毛を紡いで毛布を織る。乾燥させた家畜の糞は燃料として用いられている。

耕作期間中は家畜を山で放牧し、収穫の完了とともに家畜を村に戻すといったように、農耕活動と牧畜活動との間で利用空間が調整されている。オアシスという居住環境の制約の下にあり、農耕と牧畜という相異なる生業形態が両立するためには、このような調整が不可欠であるというのが、この地域の生態の特色であるといつてよいであろう。

1) 北海道大学文学部

2) バルティの親族名称に関しては、次の報告がある。山田孝子、「チベット系住民バルティの親族名称」、

『日本民族学会第23回研究大会研究発表抄録』37-38頁、1984年5月(国立民族学博物館)。

出産に見られる病院文化

松岡悦子¹⁾

健康な女性は病院出産で、カルチャーショックに似た体験をすると言われている。それが近年の自然分娩の運動につながっていくわけであるが、ここでは、病院をひとつの異文化として理解してみたいと考える。だが実は、病院の文化は異文化のようにみえて、現代社会の支配的な価値観を映し出すものなのである。事例として、K大学病院の計画麻酔分娩をあげ、それをもとに、いくつかの点を考察した。

まず、妊産婦が病人として扱われ、「あらゆる妊娠はハイリスクだ」という言葉にあらわされるように妊娠や不適応症状を始めとして医療の扱う対象がどんどん拡大しつつあることがわかる。また、分娩の際に行なわれる会陰切開は、分娩を短時間で終わらせるために行なわれるが、安全性と、スピードが重視されるがためである。また計画分娩は、あらかじめ出産の予定がたえられるため、能率を重視する人にとっては都合がよい。また、病院の非人間的な側面は、患者が一律に入院服を着せられることや、医師も帽子、マスク、手袋などで全身を覆ってしまうこと、さらに、内診に示されるように、患者を感情のある人間と見なさないことで成立する行為にあらわされている。次に麻酔分娩は、患者にとって楽であると同時に、意識のある医師が、ない患者をコントロールする点で有効であり、病院は、医者—患者の差を生み出さざるを得ない状態にあるといえる。また、陣痛中に流されるBGMなどの快適さを象徴する演出や、薬、手袋、器具などのふんだんな消費、多額の分娩料などは、医療がサービスであり、消費されるものであることを示している。次に、分娩監視装置や胎内の赤ん坊の頭に取りつけられるメーターなど、テクノロジーへの依存が目だっている。このような大掛かりな設備は、医療への信仰と同時に、恐怖をも患者にもたらすものである。さらに、この事例で使用される麻酔は、5種類の薬を組み合わせたものであり、バランス麻酔と呼ばれ

る。このような薬物をうまく使うための研究や、予防のための薬、健康な人がより健康になるための薬など、薬物への依存が高まっている。また、お産は本来十人十色というのが自然の在り方であるが、それに対して、あるいは、それゆえに、どのお産も画一化し、一つの理想型に近づくように工夫がこらされる。ここでは、女性は、「単に産む」のではなく、「より良い子をより良い状態で産む」ように、分娩を創りあげるものとされている。また出産に限らず、病院には儀礼的な行為や物が多くみられる。医者の白衣や、患者に対する言葉づかいは、権威を引き立てようとするものであり、消毒に対する配慮とされる手術着の着用や、私服での立ち入り禁止、母児異質性なども、儀礼的なものである。さらに、血圧測定や、聴診器で聴くことなども、儀礼的な行為の場合がある。また、病院内には秩序やハイアラキーがみられる。医者、看護婦、その他のスタッフの間の職務分担や、服装による区別、病院内の時間割りの強制、また、医者内部での開業医から専門医までのハイアラキーなどが存在する。最後に、入院する事は、一種の通過儀礼を体験することになっている。女性の出産を例にとれば、分離儀礼は、家族や日常から離れて入院することにあらわされている。境界儀礼は、死と再生を可能にする儀礼であるが、心身共に試練となるような屈辱的で苦痛に満ちた体験が、女性に一旦、死を体験させ、子供の誕生が母として再生させる役割を果たしているといえる。そして統合儀礼は、退院による日常への復帰に示されている。

以上のように、病院に於いては現代産業社会の持つ価値感が、極端にまで押し進められた形で、存在していることがわかる。

1) 北海道大学文学部

北海道民族学会会則

(日本民族学会北海道支部)

第1章 総則

- 第1条 本会は、北海道民族学会と称する。
 第2条 本会は、民族学の研究を推進し、その発展普及をはかることを目的とする。
 第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
 1 研究会及び大会の開催 2 共同調査研究
 3 日本民族学会との連絡 4 その他本会の目的を達成するために必要な事業

第2章 会員

- 第4条 本会は、民族学及び隣接諸科学の研究者で、本会の趣旨に賛同する者をもって組織する。
 第5条 会員は、研究会に出席し、研究を発表することができる。
 第6条 会員としての義務を怠ったときは、総会の議にもとづき除名することができる。

第3章 役員及び会議

- 第7条 本会に、次の役員をおく。
 1 会長 1名 2 運営委員 若干名
 3 監事 2名
 第8条 役員を選出は、次の規定による。
 1 会長は、運営委員会の議にもとづき、総会においてこれを推挙する。その任期は2カ年とする。ただし、重任を妨げない。
 2 運営委員は、総会において選出し、その任期は2カ年とする。ただし、重任を妨げない。
 3 監事は、総会において推薦し、その任期は2カ年とする。ただし、重任を妨げない。

- 第9条 役員の仕事は、次のとおりとする。
 1 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
 2 運営委員は、運営委員会を組織し、本会の運営にあたる。
 3 監事は、会計を監査する。

第10条 本会に、顧問をおくことができる。顧問は運営委員会の議を経て会長が委嘱する。顧問は、本会の諮問に応ずる。

第11条 運営委員会は、会長が必要に応じてこれを召集する。

第12条 総会は、毎年1回開催するものとし、会長がこれを召集する。ただし、会長は、必要に応じ臨時総会を召集することができる。

第13条 総会及び運営委員会の決議は、出席者の3分の2以上の賛同によって決する。

第4章 会計

第14条 本会の経費は、会費及び日本民族学会の助成、寄付金、その他の収入をもって支弁する。

第15条 会費は、総会において決定し、年度はじめに納入するものとする。ただし、運営委員会が特別の必要を認められた場合には、年度内会費に限り、これを変更することができる。

第16条 予算は、運営委員が編成し、総会の議を経ることを要する。運営委員会は、前年度事業及び収支決算について総会に報告する。

第17条 本会の会計年度は、毎年4月にはじまり、翌年3月におわる。

附則

- 1 この会則は、昭和56年9月11日から施行する。
 2 この会則の変更は、総会の議を経ることを要する。
 3 この会の事務局は、当分の間北海道大学文学部行動科学科社会生態学講座内におく。

例会の記録

1981年度

- 第1回(11月21日)
 染谷臣道氏(帯広畜産大学)
 「敬語用法から見たジャワ人の人間観」
 第2回(1月21日)
 黒田信一郎氏(北海道大学)
 「親族組織研究の最近の動向」—ギリヤークの事例から—
 口藏幸雄氏(北海道大学)
 「マレー半島オラン・アスリの生活(スライドによる紹介)」

1982年度

- 第1回(5月22日)
 L・Kamerling氏(アラスカ大学)
 「セント・ローレンス島のクジラ鯨」他 アラスカ・エキスモーの記録映画と講演
 第2回(7月3日)
 穴田義孝氏(札幌大学)
 「社会的パーソナリティと文化人類学; ことわざにみる国民性、県民性」
 菅原和孝氏(北海道大学)
 「霊長類研究と人類学」
 第3回(10月30日)
 鷹田和喜三氏(北海道拓殖短期大学)
 「北海道の開拓村落の形成と母村の文化的背景—入植村落の講義—」
 岡田宏明氏(北海道大学)
 「昭和57年度アラスカ調査報告—儀礼遺構の発見—」
 第4回(2月26日)

萩中美枝氏(日本口承文芸学会会員)
 「アイヌ文学と地名」

1983年度

- 第1回(6月11日)
 菅原和孝氏(北海道大学)
 「セントラル・カラハリ・サンの生活」
 望月 真氏(北海道栄養短期大学)
 「村落の祭祀と生活組織」
 第2回(9月10日)
 W・M・Olson氏(アラスカ大学)
 「トリングット族の社会構造」
 第3回(11月19日)
 染谷臣道氏(帯広畜産大学)
 「日本の社会とジャワの社会—JapaneseとJavane-
 se: その類似と相違」
 第4回(2月18日)
 明石嘉之氏(北大・文・修士課程)
 「小平町鬼鹿の漁撈活動」
 大島 稔氏(小樽商科大学)
 「アリュートの漁撈とその語彙について」

1984年度

- 第1回(6月9日)
 北構太郎氏(北海道大学)
 「社会の秩序性—法人類学の視点から—」
 第2回(8月20日)
 北原 隆氏(上智大学)
 「協力行動と言語の起源」
 第3回(3月16日)
 山田孝子氏(北大・研究生)
 「イスラム・チベット人、バルティの生態と社会」
 松岡悦子氏(北大・研究生)
 「出産に見られる病院文化」